

# 西ジャワ・プリアガン高地に おける水稻耕作

—若干の人類生態学的観察—

五十嵐 忠 孝\*

## I はじめに

筆者は、インドネシア共和国西ジャワ州プリアガン高地の1山村に、過去2回、比較的長期にわたって滞在する機会を得た。<sup>1)</sup>この間、筆者は村人に多くの「なぜ？」を發した。村人の答えは矛盾し、理解に苦しむことも少なくはなかったが、農耕の実際をはじめて見る筆者は、村人とのこうした会話を通して、実にさまざまなことを教わることができた。

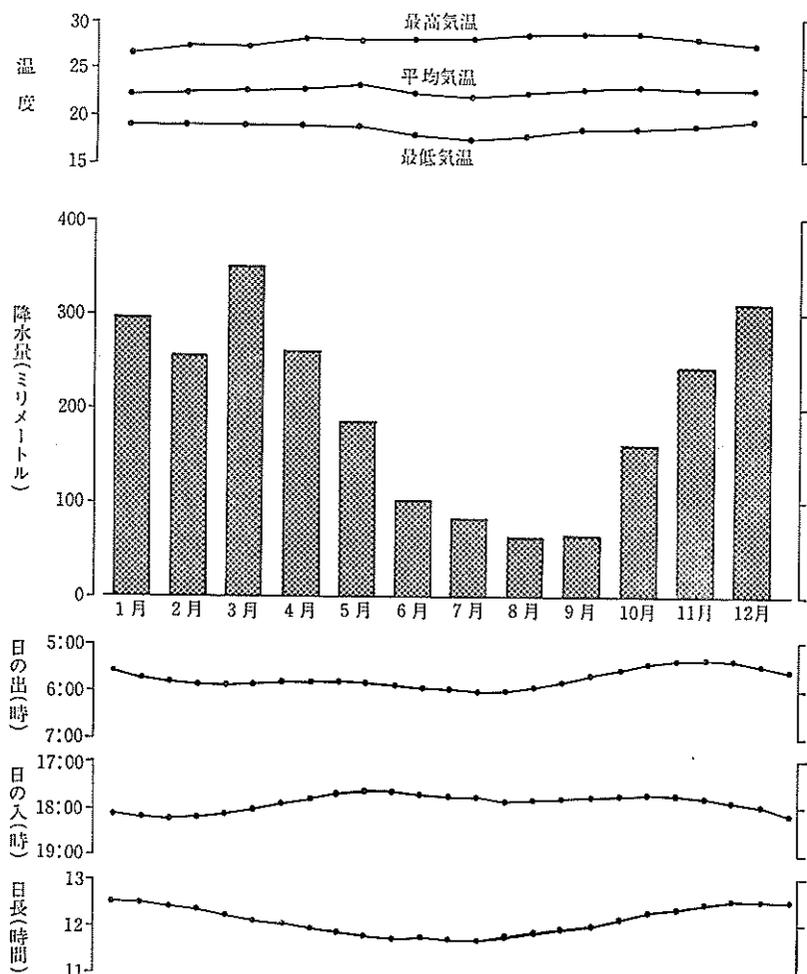
本稿では、このうち水稻耕作について、その概要を報告するとともに、2、3の点につき筆者の考えを述べてみたい。もとより、水稻耕作についての筆者の観察は体系的なものではなく、従って、本稿も水稻耕作をめぐる若干の側面についての覚え書き的なものにすぎない。

筆者が滞在したのは、オランダの統治時代から紡織の町として知られるマジャラヤ (Majalaya) から、徒歩で1時間半あまり山手に入った所にあるサラムンカル (Salamungkal) と呼ばれる *kampung* (部落) である。この部落の総世帯数は約300であるが、10~50世帯の *lèmbur* (集落) に分かれており、各集落はサラシー山 (Salasih: 標高 1,194m) の山腹から北へ延びたゆるやかな尾

\* いがらし たただか、京都大学東南アジア研究センター

1) この調査は、日産科学振興財団の研究補助金による『インドネシア人類生態学調査——とくに村落住民の生計維持機構と人口現象』(代表者: 群馬大学医学部公衆衛生学教室教授 鈴木庄亮)の一部として行なわれた。

根上(800m余)のあちらこちらに棚田に囲まれて所在する。サラムンカル部落のすぐ南側にせまる山塊斜面には畑が切り開かれ、乾季にはタバコを、雨季にはトウモロコシを主作物とする輪換耕作が行なわれている。主食である米



第1図 月別の気象状況

注) Departemen Perhubungan [1969 ; 1971-79 ; n. d.]による。

は、所有水田面積の大きい数世帯を除く大部分の世帯では、自給することができない。米の不足分は、タバコ、トウモロコシなどの換金によるほか、もよりの町への苦力出稼ぎによる収入で補なわれている。

調査地を含む地方の気象条件を第1図に示す。降水量の月別推移から、年間を6～9月の乾季、11～4月の雨季、5月と10月を両季節の移行期というように分けることができるかも知れない。プリアガン高地は、概して中・東部ジャワに較べると、乾季においても比較的よく雨の降る地方である。しかしプリアガン高地のみをとりあげても、降水量は年と場所による差はなほ大きい。プリアガンの人々に *jaman gabèng* (キャッサバの残り滓を食べた頃) の名前で広く知られる1967年は、乾季が非常にきびしかったうえ、雨季入りが異常に遅れた年であった。反対に1980年の乾季は雨季のように雨が降り続き、乾季作物のタバコが腐って、ほとんど全滅状態であった。また、1982年の乾季も大変きびしく、これに前後10回以上といわれるガルングン山 (Galunggung) の大噴火による降灰が重なったため、“*jaman gabèng* 以来の” 不作年となった。サラムンカルの村人が *hilir* (下流) と呼ぶマジャラヤなどバンドン盆地の平坦部では、乾季がきびしいと灌漑水が涸渇してしまうので、雨季の到来をまって稲作を開始しなければならない。一方、サラムンカルを含む山手の村々においては、*jaman gabèng* の年でさえ、河谷や湧水からの灌漑水が完全に涸渇することはなかったという。

平均気温は年間を通してほとんど変わらない。サラムンカル部落は、バンドン平地に較べ約200m高いが、最低気温はあまり変わらず、18℃を下回ることは少ない。しかし最高気温は、バンドン平地に較べるとかなり低く、30℃を超えることは少ない。

日の出および日の入り時刻は、年間を通じて、それぞれ午前6時と午後6時ごろであるから、日長は約12時間となる。乾季の6月に最短(11時間40分弱)に、雨季の12月に最長(12時間30分強)になり、年間差は約48分である。サラムンカル部落は、その東側にさらに高い尾根をひかえているので、実際の日長はこれより少し短くなる。

以上に述べた気象条件の季節的推移を村人がどのように判断しているのか、簡単に記しておこう。村人は降水の多寡に基づいて2つの *usum* (季節), すなわち *ngijih* (雨季) と *halodo* (乾季) を認める。雨季は *usum tiris* (寒い季節), 乾季は *usum panas* (暑い季節) と呼ばれるが、これは両季節間で平均温度は変わらないとはいえ、膚で受ける感じがかなり異なるためであろう。また、雨季は西風が卓越するため、*usum barat* (西風の季節) ともいわれる。

村人の季節への関心は非常に高く、季節の移行を示すさまざまな手掛かりは頻繁に村人の話題にのぼる。サラムンカルの村人が用いる手掛かりは、降雨のパターンそれ自身のほか、雨季入りを告げる *siraru* (*Isoptera bersayap*)<sup>2)</sup> の分封、乾季の到来を知らせる *turaés* (*Cryptotympana acuta*)<sup>3)</sup> の出現、乾季に入ってから時間の経過を示す *randu* (*Ceiba caribaea*), *kanyëré* (*Bridelia monoica*), *jéngkol* (*Zygia jiringa*) などの樹木の落葉・開花・結実、特定の時刻における *béntang kërëti* (すばる) や *béntang wuluku* (オリオン座) の位置<sup>4)</sup> などが、その主なものである。*patokan usum* または *panayogéan pataunan* と総称されるこれらの手掛かりとしかるべき農作業との対応を示す知識体系が *pranata mangsa* と呼ばれる不定時法的農耕暦であるが、ジャワ島各地の降雨型の相違に応じて、内容の異なることが知られている。

## II 水稻耕作過程

村人は、農作業を暦月に対応させて語る習慣をもたない。ためしに、水田や畑での播種、移植、除草、刈り取りなどの農作業は何月ごろ行なわれるのか、という質問をぶつけてみると、多くの村人は答えられない。あるいは当惑気味に見当ちがいない答えをする者もいる。これは、村人の使用するイスラム-ジャ

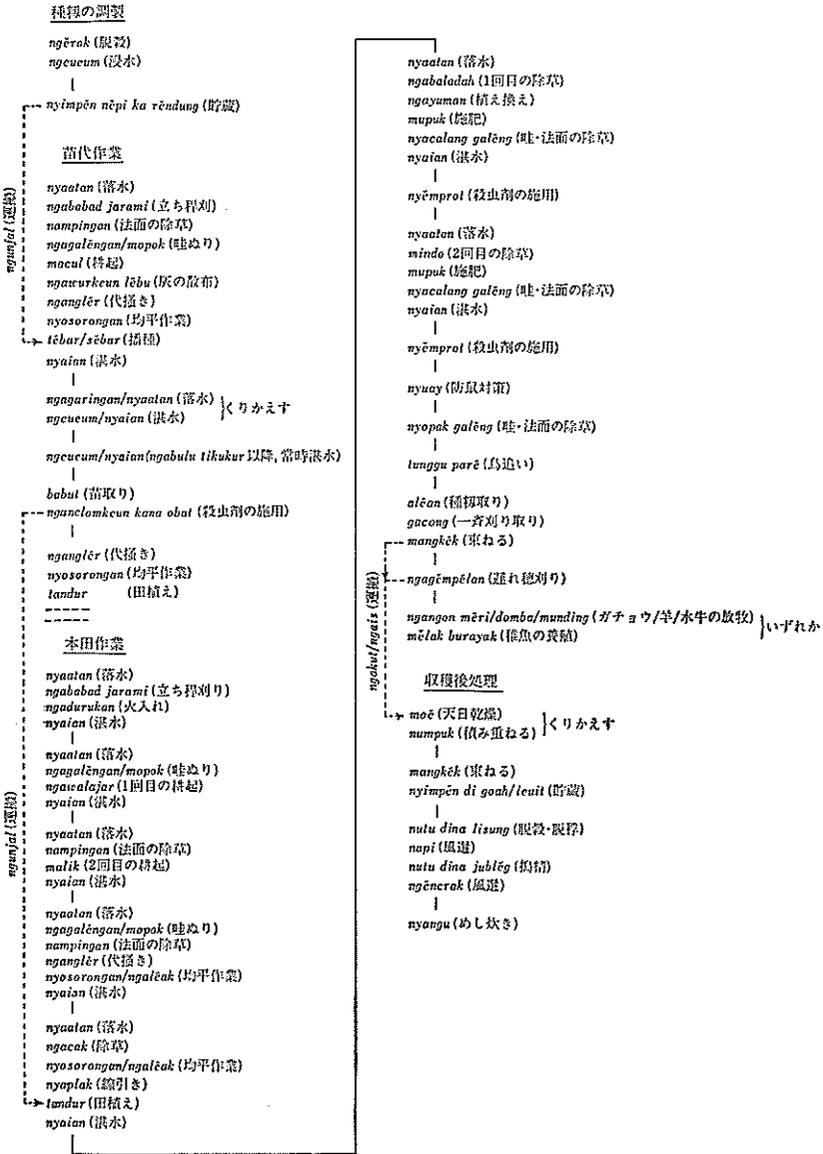
2) 大型の羽蛾の一種で、食用として好まれる。

3) クマゼミに似る。

4) これらの星座が、たとえば、背に東の空にのぼるようになったら雨季の始まりである。

第1表 稲の生育段階と主な農作業との対照表

稲の生育段階	主な農作業	病虫害など
1. <i>binih</i> (種粒)	<i>ngeueum</i> (浸水灌芽)	
2. <i>mēñitis</i> (出かかった)	<i>tēbar/sēbar</i> (播種)	
3. <i>sumihang</i> (穴苗のような)	灌水・落水をくりかえす	
4. <i>jumarum</i> (針のような)	稲時灌水	
5. <i>ngabulu tihukur</i> (キジバトの羽毛のような)	<i>tandur</i> (田植え)	
6. <i>bubuni tihukur</i> (キジバトが見え隠れする)	<i>ngabaladah</i> (1回目の除草), <i>ngayuman</i> (植え換え),	<i>hama wērāng</i> (トビイ ロウソクなど) 発生
7. <i>rampak daun</i> (葉が一斉に伸長)	<i>nyacalang galēng</i> (畦の除草)	<i>hama beurii</i> (鼠害)発生
8. <i>hameunca</i> (イヌホオズキのような)	<i>mino</i> (2回目の除草), <i>nyacalang galēng</i> (畦の除草)	
9. <i>gēdē paré</i> (大きくなる)	<i>nyuay</i> (鼠害対策)	
10. <i>mapak daun</i> (葉の高さがそろろう)		
11. <i>reuneuh panglakti</i> (交わる)		
12. <i>reuneuh leutik</i> (小さく孕む)		
13. <i>reuneuh gēdē</i> (大きく孕む)		
14. <i>culcēl</i> (ここそこで出穂)	<i>nyopak galēng</i> (畦の除草)	
15. <i>rampak</i> (一斉に出穂)	<i>nyieun pabimilian tēgal</i> (陸田代作り)	<i>hama hungkang</i> (ヘリ カメムシ) 発生
16. <i>beuneur hijo</i> (中味が入る)	<i>tunggu paré</i> (鳥追い)	<i>hama manuk</i> (鳥害)発生
17. <i>rayayan</i> (曙光色になる)	<i>doboen/nunglut</i> (穂刈り) 開始	
18. <i>konéng</i> (黄金色になる)	<i>gacōng</i> (一斉刈り取り)の日取り, <i>aléan</i> (種籾取り)	
19. <i>asak</i> (熟す)	<i>gacōng</i> (一斉刈り取り), <i>aléan</i> (種籾取り)	
20. <i>gēmpélanem</i> (遅れ穂)	<i>ngagēmpélan</i> (遅れ穂刈り)	



第2図 水稻耕作のダイアグラム

注) 実線は1日ないしそれ以上の期間が置かれることを意味する。

ワ曆が純粋な太陰曆で、グレゴリー曆に対して毎年約11日ずれるため、曆月と季節との対応がなく、従って季節の移行や農作業を曆月に対応させる習慣が生じえないためと考えられる。また、後にも述べるように、通年稲作田 (*sawah lédog*) においては、雨季作田 (*sawah gélédug*) とは違って、降雨の季節的多寡とは関係なく作付けされるので、農作業をグレゴリー曆に対応させることはそもそも不可能なのである。

農作業のタイミングは、もっぱら生育段階に対応して語られる。稲の生育段階は地域により、またインフォーマントにより、呼称が少しずつ異なるが、サラムンカル部落における呼称と対応する農作業の主なものを示せば、およそ第1表のようになる。

以下、水稻耕作過程の概要を第2図に従って紹介する。なお、以下の記述は *paré ranggeuyan* といわれる品種群(これについては後述)を念頭に置いている。

### 1. 苗代準備

苗代準備に先だって、まず、種籾 (*binih*) の脱穀が行なわれる。すなわち、次期播種用に選んだ稲穂から籾を空罐などから作ったヘラで丁寧に抜き取る (*ngërok*)。 *paré ranggeuyan* は脱粒難なので、この過程が必要である。脱穀した種籾は、袋に詰めたあと、養魚池に2～3晩沈め (*ngeueum*)、さらに暗所(普通、*goah* と呼ばれる貯蔵室)に2～3晩置いて催芽させる。なお、モチ種は脱穀せず、稲穂のまま浸水催芽させる。わずかに発芽した籾を *mëlëntis* (出かかった<sup>5)</sup>)、ついで幼根が伸長して、*sumihung* (犬歯の様な) と呼ばれる段階になると、暗所より取り出して播種される。

苗代 (*pabinihan*) には水位調節の簡単にできる *kotak* (畦で囲まれた水田区画) が1筆ないし2筆選ばれる。すべて水苗代 (*pabinihan caian*) である。陸苗代 (*pabinihan tégala*) を作らないのは、鳥害がひどいからであるという。

苗代の地拵えは、耕起が1回のみであることを除くと、本田のそれ(後述)

5) *mëlëntis* は *sumihung* と同じであるとする地方もあるが、サラムンカルでは、*mëlëntis* は *piakareun*、すなわち、発芽から発根までの段階にある籾をさす。

と同じである。耕起時には、カマドの灰、籾殻、羊やニトリの糞のいずれかがすき込まれる。肥料および殺虫効果があるという *jeungjing* (*Albizia* sp.), *kadoya* (*Dysoxylum* sp.), *surén* (*Toona* sp.) などの樹木の葉をすき込む者もいる。

催芽籾の散播は均等な密度でばらまかれるよう慎重に行なわれる。播種量は本田 100 *tumbak* (1,600m<sup>2</sup>) につき約 1.5 *geugeus* である。これを換算すると、本田 1 *ha* につき約 60kg の乾燥籾を用意することに相当する。<sup>6)</sup> モチ種は稲穂のまま浸水催芽させ、その 1 本 1 本を苗床に並べて植えつける。これは苗取り・田植え作業時にウルチ種との混同を避けるため<sup>7)</sup> という。穂播きを *tēbar*, 籾の散播を *sēbar* と呼び分ける地方もある。

播種後は苗代の冠水と落水を 2～3 日ごとに繰り返す。わずかに出芽した苗を *jumarum* (針のような) と呼ぶ。 *ngabulu tikukur* (キジバト *Streptopelia chinensis* の羽毛のような) といわれる段階になると、苗代を湛水したままにしておく。 *bubuni tikukur* (キジバトが見え隠れする) といわれるようになると、田植えが間近にせまる。

## 2. 本田準備

播種からしばらくたつと、本田準備が始まる。まず、穂摘みされたあとの立稈を鎌 (*arit*) で根元近くから刈り取る (*ngababad jarami*)。かつては、立稈が十分に腐るまで待って次回耕起を始めたので、この作業は行なわれなかったという。刈り取った稈は、水田に放置して腐らせるか、田植えが迫まっていれば、焼く (*ngadurukan*)。 つづいて 1 回目の耕起 (*ngawalajar*) を行なう。水田の経営主はここで初めて賃金労働者を雇う。あるいは、経営規模の中程度の者どうしは、労働の等価交換 (*liliuran*) を行なうことも少なくない。耕起作業

6) この値は玉井 [1944:5] や DJOECHRONI [1946] の報告する値とほぼ一致する。

7) 穂播きする理由として、従来、いくつかの説明がされている [MUSTAFA 1977:119; 玉井 1944:5; 上野 1944:79] が、 サラムンカルの村人があげたのは本文で述べた理由ひとつである。

後、約2週間、水田は湛水状態で放置される。なお、水牛による犁耕 (*ngawu-luku* または *nyingkal*) は、サラムンカル部落では、めったに行なわれない。水田の1筆面積が狭いからであるという。サラムンカルのひとつ下の部落まではさかんに行なわれている。この地方の犁耕は牽引動物として瘤牛ではなく水牛であること、1頭だてであることなどが特徴である。

2回目の耕起 (*malik*) は、1回目のそれに較べればずっと楽で、雇用する賃金労働者の数も少ない。作業後は再び湛水して放置する。1回目と2回目の耕起の際、村人は必ずといってよいほど多数の *bélut* (タウナギ *Fluta alba*) を捕える。耕起の季節には、どの家庭のメニューにもタウナギが現れ、貴重な動物性蛋白質源として食される。

代掻き (*nganglér*) は田植えの10日ほど前から前日までの間に行なわれる。代掻きの手順は、まず、斜めに構えた鍬を手前に引きつける動作を繰り返すことによって土壤を攪拌したあと、一筆面積の広い水田では、水牛1頭びきの耙 (*garu*) を牽かせる (*ngagaru*) こともある。つづいて水田面の均平作業 (*nyosorongan*) を丁寧に行なう。普通の水田では *sorong* と呼ばれる均平用具だけで、一筆面積の広い水田では、仕上げに *léak*<sup>8)</sup> を併用して行なわれる。代掻きと並行して、畦の補修 (*ngagaléngan*) と畦ぬり (*mopok*)、それに法面 (*gawir*) の雑草を鍬で根とともに削り取る作業 (*nampingan*) も行なわれる。棚田地帯では、1筆面積が小さいため、畦の総延長が長いこと、段差が大きいため法面が広いことなどのため、これらの作業は大きな労力を必要とする。なお、これらの作業は、立ち桿刈り、1回目・2回目の耕起時にも適宜行なわれる。

以上に述べた耕起2回と代掻きは、男の労働者を雇うか、労働の等価交換によって行なわれる。なお、2回目の耕起を省略する者も少なくない。<sup>9)</sup> 2回目の耕起を省略する理由としては、資金不足、土壤がまだ充分やわらかい (*hipu*)

8) *léak* は *sorong* より横幅が長いだけでなく、操作法が異なる。

9) 2回目の耕起を省略する方式は、1回目の耕起 (*ngawalajar*) の後ただちに代掻き (*nganglér*) を行なうので、両者の語尾を合わせて *jarlér* と俗称される。

などのほか、耕起作業が遅れ田植え時期が迫っていることがあげられる。最後の理由は水田の経営規模の小さい者がしばしばあげる理由であるが、彼等は賃金労働者として他人（親あるいは兄弟世帯であることが多い）の水田での耕起作業を優先するため、自らの経営水田の耕起作業は後回しになるからである。さらに、きわめて稀ではあるが、穂刈り後の立ち稈を足で踏みつけ (*ngaganépo*)、耕起を完全に省略して、いきなり代掻き・田植えを行なう場合もある。

### 3. 田 植 え

田植え (*tandur*) は播種から約40日後に行なうとされる。水田の経営者は、ここで始めて女の賃金労働者を雇うか、女どうして労働の等価交換を行なう。

田植えの手順は以下の通りである。まず、代掻き後の本田に水草が繁茂していれば、田植え作業前日か直前に両手で掻き集めた水草を土壌中に押し込む方法で除草 (*ngacak*) を行なう。除草後は再び丁寧に水田面の均平作業をする。苗取り (*babut*) は本田の広い者は前日に、そうでない者は田植え当日の早朝に行なう。苗を引き抜き、これを束ね、根の泥を洗い落とした後、葉身の先端を数cm切り落とす。これは、早く生長するため、と村人は説明する。少数の者は、このあと、苗束を殺虫剤に浸す (*nganclomkeun*)。苗束を本田に運ぶのは男の仕事で、普通、経営主 (男) 自身が行なう。本田では、予め、えぶり (*caplak*) で25×25cmの条を付けておく。この作業も経営主 (男) が行なう。苗は1列に並んだ女が後ずさりしながら、1株に4～5本ずつ正条植えされる。ただし、これは1筆面積の比較的大きな水田だけであって、1筆面積の小さい多くの水田では乱雑植えが普通である。

余った苗はけって捨ててはならないとされる。捨てる目的で苗を引き抜けば手が、踏みつけられれば足が振じ曲ってしまうという。このため、余った苗は苗の足りない者に譲渡・売却される。あるいは、本田の一部に、植え付け間隔を狭めるか、1株当たりの植え付け本数をふやすかして、密植し、後に行なわれる *ngayuman* (育ちの悪い苗を良いものに取り換える作業) の予備とする。余った苗を養魚池に植え付けることも、またよく行なわれる。稲の植え付けら

れた養魚池はごくありふれた光景で、その総収量はけっして無視できるほどのものではない。<sup>10)</sup>

苗取りの完全に終わった苗代は、ただちに代掻き・均平作業をして、苗が植え付けられる。しかし余った苗が立毛していれば、そのまま放置しておく。

#### 4. 田植え後の管理

田植え後まもなく *rampak daun* (葉がいっせいに伸びる) と呼ばれる段階に達すると、1回目の除草 (*ngabaladah*) が行なわれる。除草の方法は既述した田植え直前の除草と同じである。除草は女の仕事であるが、正条植えた水田では経営主(男)が雁爪 (*gangsrok*) か田打ち車 (*géréndél*) で除草した後、雇用した賃金労働者に入念な除草をさせる。除草作業時には、生育の悪い稲を引き抜き育ちの良いものに取り換える作業 (*ngayuman*) も行なわれる。交換用の稲には、密植した株から引き抜いたものか、前回刈り入れ時の落ち穂から自生した稲 (*kapëncar*) が利用される。落ち穂からの自生稲は畦際などに生えているが、これは誰の水田に生えているものでも自由に引き抜いてよいことになっている。

除草と同じ日か数日後に畦と法面の雑草を *parang* (鎌の一種) で除草する (*nyacalang galëng*)。羊・山羊を飼育する者は、毎日飼料として雑草を鎌で刈り集めるが、除草を兼ねて、まず自らの経営水田の畦で雑草を刈り取るのが普通である。他人の水田の畦で飼料用に雑草を刈り取ることは、水田の経営主にとって歓迎すべきことである。

化学肥料の散布 (*mupuk*) と殺虫剤の施用 (*nyëmprot*) が行なわれるとすれば、この頃である。<sup>11)</sup> *hama wërëng* は1回目の除草の頃から発生しやすくなるという。

1回目の除草後、さらに葉が伸長して *lumeunca* (イヌホオズキ *Solanum*

10) 養魚池 (*balong*) に植え付けられた稲 (*paré*) は *longré* と俗称される。

11) トビイロウンカ、クロスジヨコバイ、クロカメムシ、ミナミアオクサガメなどの害虫の総称である [KUSNADI 1980:10-13]。

*nigrum* ぐらいの背丈になる)といわれる段階になると、2回目の除草 (*mindó*) が行なわれる。畦と法面の除草、化学肥料・殺虫剤の施用も同日か数日後に行なわれるが、雑草の繁茂や害虫の発生程度により、これらの作業を省略する者もいる。

*gédé paré* (稲が大きくなり始める) と呼ばれる段階から鼠の害が発生する。村人の取る駆除対策はただひとつ、鼠の害が集中する水田中心部に立毛する稲を左右に開くこと (*nyuay paré*) だけである。こうすると水田土壌面まで日射しが届くため鼠が近よらなくなるというが、後にも述べるように、防鼠効果はほとんどないように思える。

もし鼠の害を受けなければ、稲は *mapak daun* (葉の高さがそろう) と呼ばれるようになる。これは稲が孕む (*reuneuh*) 直前の段階である。穂孕み以降の生育段階は、かなり細かく分かれている。すなわち、*reuneuh panglaki* (稲が交わる)、*reuneuh leutik* (小さく孕む)、*reuneuh gédé* (大きく孕む)、*culcél* (ここそこで出穂する)、*rampak* (いっせいにし穂する)、*beuneur héjo* (籾に中味が入る)、*rayrayan* (稲穂が曙光色になる)、*konéng* (稲穂が黄金色になる)、*asak* (熟す) などの段階が識別されている。なお、前記 *rayrayan* は *héjo punduk* (穂首がまだ緑) と *konéng tungtung* (点々と黄ばむ) の2段階から成るとする者もいる。また *konéng* と *asak* の違いは、前者の段階では葉身がまだ緑色であるのに対して、後者では葉身も黄ばむことで区別される。

穂孕み以降刈り取りまでの間に行なわれる農作業は、畦と法面の雑草を鋏で根から削り取ること (*nyopak galéng*) だけで、これは *culcél* の段階で行なわれる。*rampak* の段階で強風が吹くと、秕 (*hapa*) がふえる。また、この段階からホソクモヘリカメムシ (*hama lungkang*) による虫害が発生しやすくなる。次期作用の陸苗代を作るとすれば、この頃である。*beuneur héjo* になると、鳥害 (*hama manuk*) が激しく、子供たちは鳥追い (*tunggu paré*) で日がな水田にすることが多い。*rayrayan* になると刈り取りを始める者がでてくる。ただし、この段階での刈り取りは、登熟した稲穂を選びながら穂摘みナイフ (*étém*) で摘み取る方式で、この作業を *doknén* または *nungtut* という。<sup>12)</sup>

この方法が好んで採用されるのは、虫害・鼠害・鳥害の激しい場合で、すべての稲穂が登熟するまで刈り取りを待ったのでは損失が大きくなるからである。*konéng* になると、水田の経営主は *wali puhun* (男の祭儀師) を訪ね、収穫日を決めてもらう。収穫予定日はあらかじめ近隣・親戚に伝えられるし、収穫前日には近隣・親戚に食事が配られるので、他の村人もいつ誰の水田で収穫作業があるかを知ることができる。

### 5. 収穫作業

収穫作業の当日は、まず *wali puhun* が *Nyi Pohaci Sangyang Sri* (稲の女神) に食事と女性の衣服一式をささげ、感謝のことばを伝える。つづいて待ち構えていた多数の収穫労働者(女)は、各自が持参した穂摘みナイフにヤシ油を塗り付け、刈り取り作業を開始する。

このとき、通常の刈り取りとは別に刈り取られるものが2つある。ひとつは *ibu paré* (稲の母) と呼ばれる初穂である。この初穂は経営主(女)が刈り取ることもあれば、収穫労働者の1人が経営主に命ぜられて刈り取ることもあるが、初穂を刈り取る者は10 *aray* (束) 刈り取るまで口をきいてはいけなるとされる。もうひとつは種籾取り (*aléan*) で、これは収穫時以前の *doknén* 作業時に行なっていることもあれば、収穫作業時に行なうこともある。

稲の刈り取りは、穂摘みナイフを右手に持ち、これで茎軸を止葉の付け根の少し下で切り取る動作を繰り返し、右手に幾本か稲穂がたまると左手に移し、すべての止葉をすばやく剥ぎ取るという方法で行なわれる。これを繰り返し、やがて左手の稲穂が握り切れなくなると畦に置いて刈り取り作業を続ける。

刈り取った稲穂の茎軸を親指と人差し指で作る輪ほどに束ねたものを *aray*, これを3つ束ねたものを *eundan*, さらにこれを2つ束ねたものを *geugeus* と呼ぶが、このうち *geugeus* は収穫高などを稲穂の量で表現する時の単位とし

12) *doknén*は、「手を突込んで捜し出す」の意味をもつ *ngodok* と「収穫」を意味する *panén* からなる合成語である。また *nungtut* の原義は、何かを「少しずつ」することである[SATJADIBRATA 1942:365]。

て用いられる。1 *aray* 刈り取るのに要する時間は7～8分で、収穫労働者1人が1回の作業で刈り取る稲穂の量は3～4 *geugues*, 最大でも5 *geugeus* である。収穫労働者は各々の刈り取り分を経営主の家まで運ぶこと (*ngakut* または *ngais*) が義務づけられている。

収穫作業には部落の内外を問わず誰でもが参加することを認められ、各自が刈り取った稲穂の10分の1を報酬 (*babon*) として持ち帰ることができる。このような刈り取り方式は報酬を1 *sanga* (=10*geugues*) につき1 *pocong* (=1 *geugeus*) の割合で与えるので、2つのことばを合わせて *gacong* と通称される。ただし、この *gacong* 作業を完全に公開するのは経営水田のかなり広い者だけであって、経営規模の小さい者は同じく *gacong* とは称しても、収穫作業を近隣・親戚の者に限ったり、さらに経営規模の小さい者は家族労働だけで刈り取りを行なう。

他人の水田の刈り取り作業に参加すること (*dērēp*) は多くの零細な農民にとって米を入手する貴重な機会である。*dērēp* 1回当たりに受け取った報酬 (最頻値は0.5*geugues*) は実際には刈り取り分の10分の1を超えていることが多かったが、これは、水田経営者の親類縁者に当たる収穫労働者には正規の報酬のほか追加報酬 (*babon ti jēro*) が与えられるため、もっぱら効率のよい親類縁者の水田での刈り取りに参加する者が多いためと考えられる。

## 6. 収穫後の処理

収穫後の稲束は、数日、天日乾燥 (*moé*) された後、*goah* (家屋の一部を仕切った貯蔵室) か *leuit* (家屋とは別棟の高床式米倉) に積み重ねて貯蔵され、必要に応じてこれを出してきて、*sorondoy* (別棟の米搗き小屋) の *lisung* (長大な木製の臼) と *halu* (立て杵) で脱穀・脱稈を、*jublēg* (小型の石臼) で搗精をそれぞれ行なう。初穂も同様に貯蔵されるが、これが利用されるのは、すべての貯蔵米を食べ尽した後かあるいは家族に死者の出た場合に限られる。

刈り取られた水田が小作地であれば、同日あるいは数日以内に地主への地代が支払われる。サラムンカル部落での水田小作はすべて収穫折半方式 (*nēngah*)



落全体として各農作業のピーク時期は約1カ月である。従って、農繁期、農閑期、それに米の端境期など、稲作周期に伴う季節性を明瞭に認めることができる。サラムンカル部落を含む山間地域一帯についても同様であるが、ただし各村落の稲作周期はたがいに少しずつずれている。上野〔1944：81〕によればパンラゴ-グデー山（Pangrango-Gédé）の南西裾野に位置する村落においても同様で、「区内ニ於ケル稲作ハ一斉作業ニシテ、各農家期ヲ同ジウシテ稲作作業ヲ開始ス」という。

しかしながら、今日のジャワ島において同一の農作業を各世帯がほぼ同時期に行なうのは、必ずしも一般的なことではない。バンドン平地やチアンジュール平地など、ブリアガン高地の稲作地帯を歩いて見ると、稲刈りと田植えが隣り合った水田で同時に行なわれているといった光景は、いつでもどこかで見ることができる。時には稲の生育段階が水田の1筆ごとに異なることすらある。このような所では、村落あるいは地域全体として、稲作周期に伴う季節性を認めることができない。

稲作が通年可能な地域で農作業を一斉に行ない、世帯間の稲作周期をわざわざ同調させているのはなぜであろうか？ 各世帯が同一時期に同一の作業を行なえば、一時的にせよ人手不足が生じる<sup>14)</sup>、端境期の米の値上がりのような不都合が生じる。労働需要を年間にわたって分散させるためにも、端境期における米の値上がりを防ぐためにも、各世帯の稲作周期がずれている方がむしろ有利だ、と一応は考えることができる。にもかかわらずサラムンカルの村人は稲作を一斉作業として行なっており、勝手な時期に作付けをして稲作周期を乱すことにはかなり強い規制がかかるらしい。

筆者は、「どうしてこの部落の人たちは一斉に同じ農作業をするのか？」

14) 筆者にとっては意外なことであったが、農作業を適期に行なえない理由として村人が第一にあげるのは人手不足である。賃金労働を行なう中・下層世帯の者は、農繁期になると、1～2週間先まで被雇用や労働の等価交換の口約束が決まっていることも珍しいことではない。また、親・兄弟世帯からの依頼を除いては、部落内での賃労働を嫌い、収入のよいバンドンでの苦力出稼ぎに行く者も少なくない。

*hilir* (マジャラヤなどバンドン盆地の平坦部) のように、それぞれの家が作付けをずらせば農繁期の人手不足も端境期の米の値上がりもなくなるではないか?」という問いかけを機会あるごとに行なってみたが、「そんなことをしたら、鼠の大襲撃 (*ngagẽbrong* または *napuk*) を受ける」というのが村人の決まった説明であった。村人の中には、鼠だけでなく、病虫鳥獣害一般 (*hama*) が発生しやすくなると語る者もいる。

筆者と村人がこのようなやりとりをしたのは、サラムンカル部落を初めて訪れた1979年の時点である。その後、サラムンカルのごく一部の者が高収量短稈品種を試みた結果、村人の懸念していた事態が発生することになった。以下に高収量短稈品種導入の顛末を記そう。

筆者がこの地方を初めて訪れた当時 (1979年)、バンドン平地などでは少しも珍しくなくなっていた高収量短稈品種は、サラムンカル部落とその一帯ではまだまったく栽培されていなかった。村人は当時、「ここは *hilir* (平地部) と違って水が冷いから *paré pẽndék* (高収量短稈品種の総称) は適さない。だから植えるつもりはない」と語っていた。ところが2年後の1981年、筆者がこの地方を再び訪れた際には、山手の水田にも新品種がかなり植えられていた。サラムンカル部落においても新品種栽培が試みられていたが、わずか3人が経営水田の一部に植え付けているのみであった。この3人のうち、最も早く新品種を採用した者は、ちょうど4回目の栽培を行なっているところであった。ところが前3回の収量は、いずれも「鼠の喰い残し (*tilas beurit*) を刈っただけ」の惨憺たる結果に終わったという。

鼠は、従来ならば、稲が *gẽdẽ paré* と呼ばれる生育段階に達する頃から畦の孔に集まり始めたが、新品種の栽培を始めてまもなく多数の鼠が周年住みつくようになり、新品種が“食べ頃”になるとたちまち被害を受けるだけでなく、在来種へも甚大な被害が及び始めた。このため新品種栽培は次々に中止され、1982年4月始めの刈り取りを最後にサラムンカルで新品種を栽培する者は1人もいなくなってしまった。このような事情は、当時サラムンカル部落一帯でも同様に、「やはり在来のやり方に戻らなければならない」 (*balik sẽnula*)

と村人が語るのをしばしば耳にすることができた。筆者がサラムンカル部落をもっとも最近訪れたのは1983年4月であるが、その後再び新品種を採用している者はいなかった。

新品種の栽培が失敗とわかって以来、新品種を試みた3人に対する村人の評価はかんばしくないようだ。このような評価があることを知ってか、3人のうちの1人は、稲作周期を乱さないような配慮を十分にすると主張する。すなわち、村中の在来種が *rampak* (一斉に出穂する段階) になる頃、新品種もまた *rampak* になるように植え付けを遅らせたという。この村人は、ところがあとの2人はこのような配慮をせず、はじめは在来種と同時に植え付け、その後は刈り取りのあとただちに植え付けることを繰り返したので、この村の稲作周期がすっかり狂ってしまったのだと説明する。

以上に述べたサラムンカルにおける高収量短稈品種導入の顛末とこれに対する村人の説明が示唆するように、伝統的に稲作が一斉作業として行なわれて来たのは、病虫鳥獣害、とりわけ鼠害の発生を回避し、あるいは発生した場合でもその被害を分散させ、各水田の受ける損失を最少にする意図に基づくように思える。前章で触れたように、稲の植え付けが人より遅れること (*kapan-deurian*)、時期はずれになること (*hasêlangan*) を回避するため耕起を1回に省略したり、耕起から代掻きまでの放置期間をはしょったり、あるいは他人の苗代の一部を借用する<sup>15)</sup>などして時期に間に合わせようとするのは、このためであると考えられる。

さて次に、作付けのタイミング、とりわけ作付けと降水の季節的変化との関係について述べてみたい。

筆者は当初、サラムンカル部落では雨季と乾季にそれぞれ1回ずつ稲の収穫が行なわれていると考えていた。この理由は、村人が稲の収穫は1年に2回であると述べたこと、*paré ngawuku* (雨季稲)、*paré morékat* (乾季稲——これ

15) 稲の虫害・鼠害対策としてでなく、水田マラリアの媒介蚊である *Anopheles aconitus* の発生予防のため稲作周期を同時化するような指導が行なわれるのも、同じ理由からであろう [OVERBEEK *et al.* 1937:26-38; 山口 1943:22-24]。

はまた *paré malik jarami* ともしいう)という呼び分けがあることなどである。

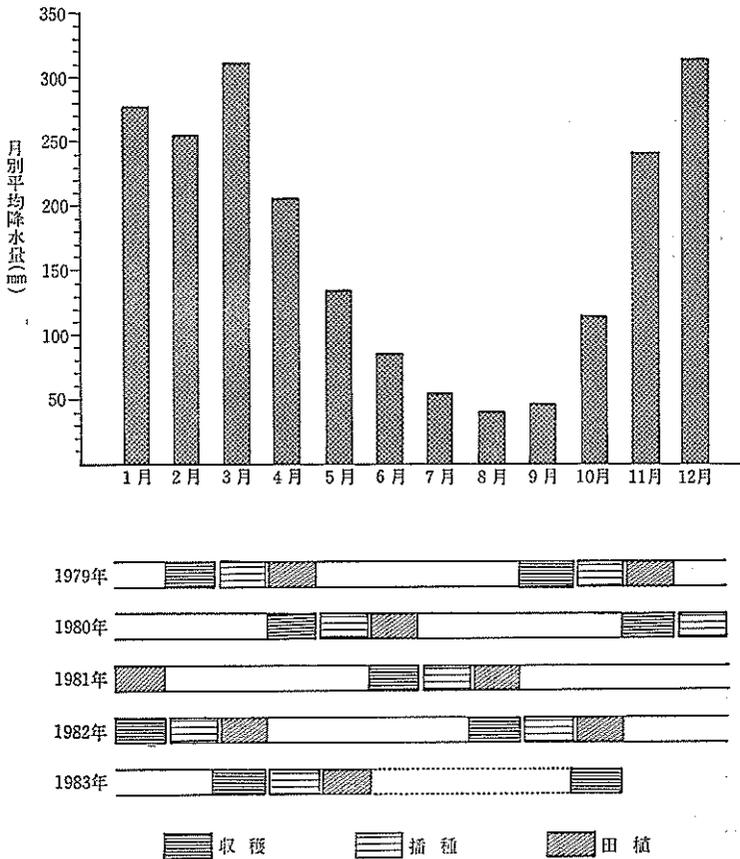
ところが妙なことに、筆者が当時田に植わっていた稲を指し示しながら、これは *paré ngawuku*なのか *paré morékat* なのかとたずねてみると、ある者は *ngawuku* と答え、他の者は *morékat* と答え、さらに他の者はよくわからない、と答えるのである。さらに妙なことに、村人の述べる稲の生育期間は1年に2回の収穫を得ることがどうしても不可能なほど長いのである。すなわち、サラムンカルで当時栽培されていた稲品種はいずれも生育期間（ただし田植えから刈り取りまで）が5～6カ月、播種から田植えまでは約40日であるというから、雨季作と乾季作を合わせると1年を少し超える長さになってしまう。

筆者は、ワセとオクテを交互に植え付けることでもしない限り1年に2回の収穫を得ることは不可能ではないか、という疑問をぶつけてみたが、この疑問を理解した村人はいなかったようだ。農作業を暦月に対応させる習慣がなく、また“1年”(*sataun*)が農耕暦とはまったく関係をもたないイスラム-ジャワ暦のそれを意味するためであろうか、いずれにせよ、期間あるいは暦月についての村人の応答は正確さを欠くうらみがある。

そこで2度目にサラムンカルを訪れた際、農耕暦を作ることをひとつの目的として、文字の書ける村人に約1年にわたり日記をつけてもらうことにした。この日記はその日に行なった主要な仕事をひとつだけワン・センテンスで書くという簡単なものであるが、これから、播種日、田植え日、刈り取り日、それに品種名が確認できるものを選び出したのが後掲の第4表である。この表に示されるように種籾取りから播種まで、および播種から刈り取りまでを合わせた期間は、いずれの品種の場合でも1年2作を行なうには長すぎる。種籾取りから播種までの期間は数日からせいぜい1カ月であるので、このような作付けを続ければ長期的には稲作周期と降水の季節的变化との対応は見られないはずであるし、多くの年は2回の収穫を得られるが、収穫が1回だけの年もあるはずである。

これを確かめるためには過去数年の収穫時期を暦月によって特定すればよい。しかしこれは思ったほど簡単な作業ではなかった。試みに、筆者がサラム

ンカルに滞在していた時点から1年ないし2年さかのぼった期間内で行なわれた刈り取りの時期が何月（イスラム-ジャワ暦で）であったかをたずねてみたが、村人の応答は利用するに耐えないほどまちまちなものであった。ところが幸いなことに、村人はある事件の生じた頃、稲がどのような生育段階であったかをよく記憶している。すなわち結婚、あるいは子供の出生など発生年月日を



第3図 サラムンカルにおける稲作周期と月別降水量との対応

注) 月別平均降水量は Departemen Perhubungan [1969] による。

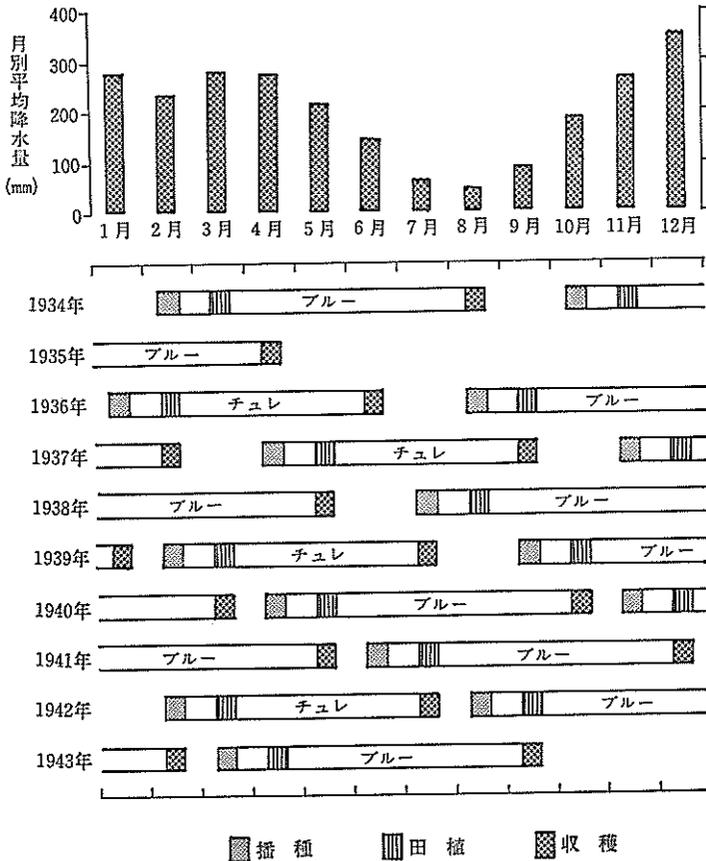
16) 知ることでできる過去数年以内の事件をまず集め、各事件が発生した当時、稲が何という生育段階であったかを本人またはその親にたずねれば、収穫時期を暦月で特定することができる。ただし、部落全体として収穫作業のピーク時期は実際には連続する2つの暦月にまたがっていることが少なくないが、ここで用いた方法ではピーク時期を暦日の単位まで正確に知ることは不可能である。

筆者がサラムンカルを最初に訪れた1979年の2月に観察された収穫を出発点として、以上に述べた手続きで確認したその後の収穫時期を1983年3月の時点まで図示すれば、第3図のようになる。この図に示されるようにサラムンカルにおける過去5年にわたる稲の収穫時期は7カ月の周期で規則的に到来している。このことは稲の作付けが降水の季節的変化とは無関係に行なわれていることを意味する。この部落の次回の収穫予定は1983年10月頃となるので、1979年から1983年までの5年間にちょうど9回の収穫があったことになる。

このような作付様式はサラムンカル部落一帯で広く見られる。ただし、それぞれの部落は、たがいに少しずつ稲作周期がずれている。ブリアガン高地におけるこのような作付様式は、すでに上野〔1944：87-88〕によって報告されている。この報告は部落全体についての収穫時期でなく、ある特定の水田についての収穫年月日の記録であるが、第4図に見るように、次期作開始までの準備期間が異なることを除けば、作付けは降水の季節的変化と無関係であること、収穫期は7～8カ月の間隔で規則的に到来することなど、サラムンカルの事例と大変似ている。いずれの事例においても、長期的に観察すれば、作付けは1年のどの月にも行なわれるから、*paré ngawuku* (雨季稲)・*paré morékat* (乾季稲)という呼び分けがあるにもかかわらず、ある特定の作付けをこのどちらと<sup>17)</sup>呼ぶかの判断をめぐって、村人の中に混乱が生じるのは当然といえるであろう。

16) 結婚は、結婚証明書 (*surat nikah*) を当人が持っていれば年月日を容易に知ることができる。子供の出生は、別稿〔IGARASHI 1983〕に述べた方法によりその年月日を特定することができる。

17) 1年に2度、雨季と乾季(より正確には、雨季の始めと雨季の終り)に作付けされる畑作物、たとえばインゲンマメ (*kacang bewreum*) についても *kacang ngawuku* (雨季豆)・*kacang morékat* (乾季豆) と呼び分けられているが、これには、当然のことながらまったく混乱が見られない。



第4図 チマヒにおける稲作周期と月別降水量との対応

注) 上野 [1944:87-88] より、全生育期間をブルー種は6ヶ月、チュレ種は5ヶ月と仮定して作図。月別平均降水量は Departemen Perhubungan [1969] による。

降水の季節的变化と無関係な作付けは、いうまでもなく、どのような水田でも可能というわけではない。このような作付けが行なわれるのは、村人が *sawah lédog* または *sawah boyoran* と呼ぶ通年稲作田 (通年稲作可能な水田) だけであって、乾季には水掛りの悪くなる *sawah gèlèdug* と呼ばれる雨季作

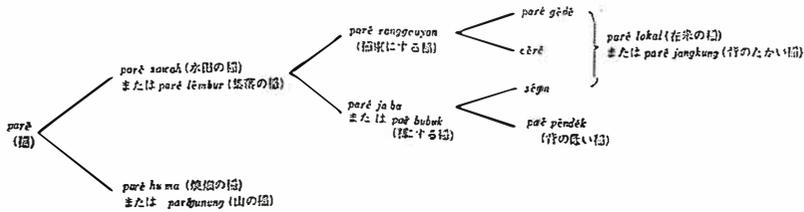
田（雨季にのみ稲作可能——乾季には、通常裏作 *malawija* が行なわれる）では、当然のことながら、雨季の始めに播種、雨季の終りから乾季の始めにかけて収穫というような降水の季節的变化に対応した周期性が見られる。

サラムンカルの村人が耕作する水田には、雨季作田がないわけではないが、その多くは通年稲作田である。しかし、すべての通年稲作田には常に稲の作付けがされているかという点とそうではなく、実際には畑地化して、比較的生育期間の短い畑作物が裏作されることもある。裏作の行なわれる水田は、村人が *sawah lédog*（通年稲作田）と分類する水田の中でもあまり条件のよくない水田であることが多い。すなわち乾季には水掛かりが悪化し、稲作を行なうことができてもその作柄に不安のあるような水田である。このような水田では、作付け時期が降水の季節的变化のどの位相に来るかにより、また、年ごとに異なる乾季のきびしさの程度により、稲を植えつけるかあるいは裏作をするかの微妙な選択が行なわれ、裏作の方が有利と判断されれば、裏作が行なわれることになる。裏作を行なった後は再び稲が植え付けられるが、植え付けのタイミングには他の水田と稲作周期を合わせるような配慮がされる。このため、サラムンカルで行なわれる裏作は、雨季作田におけるそれは別として、ある年には行なわれるが翌年には行なわれないというように、また、その開始時期は稲の刈り取り時期に左右されるというように、大変不規則に行なわれることになる。

#### Ⅳ 水稲の品種群

多くの農学関係書はジャワ島の在来種をブルー種とチュレ種という2大品種群名で紹介している。ところが村人によるエミク的な分類では、在来の稲は3つに分けられる。

*paré* は、広義には陸稲を含むすべての稲を意味するが、村人の分類に従うと第5図に示すような品種群に分かれる。すなわち、*paré sawah*（水田の稲）または *paré lëmbur*（集落近くの稲）と呼ばれる水稲は、穂刈りのあと稲束に



第5図 サラムンカルの村人による稻の分類

第2表 水稻の3品種群の主な特徴

	<i>paré gédé</i>	<i>céré</i>	<i>ségon</i>
1. 刈り取り法	<i>ranggeuy</i>	<i>ranggeuy</i>	<i>heucak</i>
2. 貯蔵法	<i>geugus</i>	<i>geugus</i>	<i>bangsal</i>
3. 脱粒性	難	易(枝梗ごと)	易(籾ごと)
4. 芒	ほとんどの品種あり	なし	なし
5. 耐肥性	強	弱	弱
6. 耐旱性	弱	強	強
7. 耐病虫性	弱	強	強
8. 耐倒伏性	強	弱	弱
9. 生育期間	(第3表および第4表を参照)		
10. 感光性	なし	なし	あり
11. 種子休眠性	なし	なし	なし
12. 食味	<i>pulén</i>	<i>sēség/morolok</i>	<i>béar</i>

して貯蔵する *par éranggeuyan* と、刈り取り後ただちに脱穀して籾状態で貯蔵する *par éjabā* (または *par ébubuk* ともいう) の2品種群からなる。さらに *par éranggeuyan* は *par égédé* と *céré* とに、*par éjabā* は *ségon* と *paré pëndék* (高収量短稈品種に対する総称) とに、各々分かれる。ここでは、この *par épëndék* を除き、村人が *par élokal* (在来の種) または *par éjangkung* (背の高い種) と総称する3つの品種群、すなわち、*par égédé*, *céré*, *ségon* について論をすすめよう。

村人の説明による3品種群の主な特徴は第2表のように整理することができる。これらの品種群は、まず刈り取りの方法が異なる。*ranggeuy* とは、第II章で述べたように、穂摘みナイフで止葉の付け根の少し下で切り取った稲穂を

意味するが、*paré gèdé* と *céré* はいずれも *ranggeuy* の形で刈り取り、これを *geugeus* (稲束) にして貯蔵する。このため、この2品種群は *paré ranggeuyan* (*ranggeuy* にする稲) と総称される。これに対して、*ségon* はやはり穂摘みナイフで(まれに鎌で)穂刈りされるが、切り取る個所が止葉の付け根の下でなく穂首節間であるため、切り取られた稲穂は、*paré gèdé* や *céré* のそれに較べ大変短い。この短い稲穂は *ranggeuy* とは呼ばれず、*heucak* と呼ばれる。この *heucak* は短いため稲束にすることは不可能で、刈り取り後ただちに圃場で、あるいは袋かかごで経営者の家まで運ばれた後、足で踏みつける(*irik*)、手で扱き取る(*arol*)などの方法で脱穀される<sup>18)</sup>。*ségon* は、従って、粃(*bangsal*)で貯蔵される。

ただし、*paré ranggeuyan* は常に *ranggeuy* の形で刈り取られるのかというと、そうではない。遅れ穂刈りの時は *paré ranggeuyan* であっても *heucak* の形で刈り取られることはすでに述べたとおりである。また、穂首節間のない高収量短稈品種は止葉の付け根のすぐ下で切り取られるが、この稲穂は *ranggeuy* ではなく、*heucak* と呼ばれる。結局、稲穂にはその長さにより *ranggeuy* と *heucak* の2種類があることになる。*ranggeuy* の形で刈り取られればその収量は稲束(*geugeus*)の数で、*heucak* の形で刈り取られれば *heucak* のままの重量か、あるいは脱穀後の粃重量(または石油罐 *blék* で何杯分か)で表現される<sup>19)</sup>。

このような刈り取りとその後の処理方法の違いには脱粒性の難易が関係して

18) *ségon* と高収量短稈品種は、平地部では、鎌で根元近くから稲株ごと切り取ったのち稲穂部分を圃場に敷いたむしろに叩き付けて脱穀する方法が取られているが、サラムカルでこの方法をとる者は少ない。

19) 稲穂の長さの違いに関連して問題となるのは粃換算する時の係数である。すなわち、稲穂を粃換算するためには稲穂重量に一定の換算係数を乗じる必要があるが、この換算に用いられる係数はインドネシア全国で一律のものが使用されているらしく、筆者がバンドン県庁農業局で入手したものを始め、加納 [1979:132]、本岡 [1970:109]、矢沢 [1975:350]、SHIRAISHI [1982:124] などの引用する換算表は実質的には同一である。しかし、これらの換算表には *ranggeuy* と *heucak* に相当するような稲穂の長さによる区分が明示されていない。稲穂の長さにより粃換算の係数は異なると思われるが、なぜそのような配慮がされていないのか筆者は不思議に思っている。

第3表 水稻の主な品種とその性質

品種群	品 種 名	芒の有無	籾色	玄米色	香りの有無	生育期間*	糯梗	備 考
pare gedé	1. baod	+	白	白	-	晩	梗	単独栽培, または <i>galuur</i> の主品種. 芒が白く, 長く, 密.
	2. baod sikéþ	+	白	白	-	晩	梗	同上.
	3. rangaling	+	濃黄~赤	赤	-	早	梗	単独栽培のみ
	4. racit	+	濃黄	白	-	早	梗	<i>galuur</i> の構成品種.
	5. padang sari	+	赤	白	-	早	梗	同上.
	6. gébot	+	**	白	-	早	梗	同上.
	7. jidah	+	黄	赤	+	早	梗	同上.
	8. éndon	+	黄	白	-	早	梗	同上.
	9. sari mahi	+	濃黄	白	-	早	梗	同上.
	10. kêtan bodas	+		白	-	早	糯	糯種では一番ウマイ.
	11. kêtan hideung	+		黒	-	早	糯	
	12. kêtan hideung rogol	-		黒	-	早	糯	
	13. kêtan beureum	+		赤	+	早	糯	
	14. kêtan cikur	+		黄	赤	早	糯	
céré	1. céré bodas	-		白	+	早	梗	<i>céré bodas</i> に較べ, 香りは劣る.
	2. céré beureum	-		赤	+	早	梗	<i>ségon</i> では一番ウマイ.
ségon	1. ségon saga	-		白	-	晩	梗	
	2. ségon bénjang	-		白	-	早	梗	
	3. ségon beureum	-		赤	-	晩	梗	
	4. ségon kêtan	-		白	-	早	糯	
	5. ségon kêtan hideung	-		黒	-	早	糯	

\* 村人によるワレセ・オクテの区分は相対的なものにとぎない. 実際の生育期間については第4表を参照.  
 \*\* *koung kayas* (白味がかった赤~黄)

第4表 生育期間のいくつかの例

品種群	品 種 名	種籾取り ~播種(1)	播種~田 植え(2)	田植え~ 収穫(3)	播種~収 穫(2)+(3)
paré gèdè	1. baod	—	53	136	189
	2. baod sikèp	20	49	141	190
	3. baod sikèp	—	54	131	185
	4. baod sikèp	19	42	142	184
	5. rangaling	23	42	135	177
	6. galiwur (主品種は baod)	6	52	134	186
	7. galiwur (主品種は baod)	43	21	158	179
cèré	1. cèré beureum	54	32	144	176
ségon	1. ségon saga	10	48	137	185
	2. ségon saga	7	56	133	189
	3. ségon saga	17	42	140	182
	4. ségon saga	—	58	131	189
	5. ségon kètan	10	48	119	167
	6. ségon kètan	—	42	134	176

\*実際の収穫は何日にもわたるのであるが、ここでは収穫日を一齐刈り取り (gacong) の日とした。

いると考えられるが、この点で興味深いのは cèré についての村人の説明である。すなわち cèré は「稲穂を足で踏みつけても、叩き付けても脱穀しにくいので、paré gèdè と同じように稲束 (geugeus) にして貯蔵する」のである。ところが、「cèré は paré gèdè と違って、天日乾燥をするうちに脱落が激しくなる。ただし、その脱落は ségon のように1粒々々の籾が脱落するのではなく、cangci (枝梗) ごと脱落する」のがその特徴であるという。

村人が稲の3品種群について語る時、paré gèdè に対して ségon・cèré を対比させることが多い。ségon と cèré はいくつかの点で共通する特性を持つからである。例えば、bulu (毛) と表現される芒を ségon と cèré は持たないが、paré gèdè は1品種 (kètan hideung rogol) を除き、すべてが持つ(第3表)。このため、paré gèdè は paré buluan (毛のある稲) とも呼ばれる。ségon と cèré に共通する特性は、また、肥料をやらなくとも十分な収穫の得

られることであるが、これに対して、*paré gèdé* は十分な収穫を得るためには肥料を与えるか、あるいは条件のよい肥えた水田に植え付ける必要がある。条件の劣る水田（水掛かりが悪い、冷たい湧水が直接流れ込む、森林の辺縁部などであって日当たりが悪いなど）には、必ず *ségon* か *céré* を植え付ける。*paré gèdé* は病虫害（*hama*）に弱いので、病虫害の発生しやすい乾季作には *ségon* か *céré* に換える。*ségon* と *céré* はいずれも倒れやすい等々、両品種群に共通の特性は多い。

しかし、「*ségon* は、乾季に向って栽培すると（乾季の最盛期に収穫となるように作付けすると）、雨季に向って栽培した時に較べ収穫までの期間が1～2週短くなるが、*paré gèdé* と *céré* はいつ植え付けても収穫までの期間は同じである」という。第1図に見るように、雨季の後半から乾季の前半（およそ1月から7月）にかけて日長は短日条件にあるので、*ségon* は鈍い感光性を持つらしいと考えることができる。なお、「どんな品種の稲でも刈り取りのあとすぐ水に浸せば、いっせいに発芽する（*ngarëndung*）」というから、種子休眠性のある品種は知られていないらしい。

食味の点で最も好まれるのは *paré gèdé* である。“うまい”とされるメンは、指先で摘まんだときポロポロとくずれず、しかも指先にべと付かない程度のねばり気を有するものである。このような適度なねばり気のある状態は *pulën* と形容されるが、*paré gèdé* は *pulën* の点では最上とされる。これに対して *ségon* は、*ségon saga* のように“うまい”とされる品種もあるが、一般には *paré gèdé* より食味の劣る品種群とみなされている。*ségon* の不味の理由は *béar*、すなわちポロポロとして適度な粘り気に欠けることがあげられる。

一方、*céré* のメンは *pulën* とも *béar* とも異なる *sēsēg* という言葉で形容される。この言葉は“強い”とでも訳することができるのだろうか、村人はこの *sēsēg* を、「汁物なしに1皿も食べたらすぐ腹いっぱいになるような味。*pulën* なメンなら、おかずなしで2皿も3皿も食べることができるのに…」と説明する。<sup>20)</sup> *céré* メンは、香りを持つこともあって、その食味を好む者

も少なくない。

*céré* と *ségon* は多くの点で似た性質を持つにもかかわらず、サラムンカルで植え付けられている稲は *paré gèdè* と *ségon* の 2 品種群であるといってさしつかえないほどに *céré* の植え付け面積は大変少ない。この理由として村人があげるのは、*ségon* の収穫後の調製が簡単なことである。すなわち *céré* は *paré gèdè* と同様に、稲束を立て杵で搗いて、脱穀・脱稈を *li sung* (長大な木製の臼) で、搗精を *jublæg* (小さな石臼) で、というように二重に手間がかかる。その上、*lisung* があるのは上層世帯だけであって、近隣の 10 数世帯がこれを入れ替りたち替り使うから、いつでも都合のよい時に *li sung* を使うわけにはいかない。これに対して *ségon* は踏みつけるなどすれば簡単に脱穀することができるうえ、脱稈・搗精は小さな石臼ひとつでできるし、あるいは精米機にかけることもできる。サラムンカルに初めて精米機が導入されたのは 1978 年であったというが、それ以来、脱稈・搗精の簡便さから *céré* の栽培をやめ、*ségon* に換える者が増えたという。

にもかかわらず現在でも小面積ながら *céré* が栽培されているのは、その食味と香りを好む者がいるためだけでなく、初穂 (*ibu paré*) を刈り取る目的で植え付ける者がいるためである。<sup>21)</sup> 初穂をとるために *céré* を栽培するのは経営水田の小さい者で、その植え付け面積もほんの 1 筆か 2 筆に限られる。一般に経営規模の小さい者ほど条件の劣る水田を耕作しているので、たとえ初穂を取る目的であっても、作柄の不安から、*paré gè dè* ではなく *céré* が選ばれるのであろう。

20) *sēsēg* の本来の意味は、「物が蓄っていっぱい」、「(身体・建物などが) 頑丈な」などである [LBSS 1976:471; RIGG 1862:443; SATJADIBRATA 1942:306]。なお、*céré* メンについて用いられるもう 1 つの表現 *morolok* は、粘り気が不足するという点では *béar* と共通する意味を持つらしい。

21) 初穂は *paré gèdè* でも *céré* でもよいが、*ségon* を初穂とすることはできない。

## V 意図的品種混合

2種ないしそれ以上の品種が混じりあっている稲を *galiwur* と呼ぶ。これは意図的に2つないしそれ以上の品種の種籾を混ぜあわせてから播種したものであって、何らかの偶然によって混ざりあったものではない。筆者は、この *galiwur* について語るだけの十分な材料をいまだ持たないが、村人の述べる *galiwur* 栽培の利点とその理由について、筆者の理解しえた範囲内で紹介してみたい。

村人は *galiwur* を独立した1つの稲品種のごとくみなすが<sup>22)</sup>、その構成品種の数と混合割合はさまざまである。いずれも当初は2つないしそれ以上の品種を種籾の段階で意図的に混ぜあわせたのち播種されたもので、誰がいつごろ作った *galiwur* であるかがはっきり判っているものもある。今日においても村人は新しい *galiwur* を作り出す。筆者も、わずか1例ではあるが、*galiwur* を“調合”する現場を目撃することができた。

*galiwur* を構成する品種は原則として *paré gèdé* に属する品種である。現在、サラムンカルで栽培されている *galiwur* の多くは主品種を *baod* か *baod sikěp* とし、これと、*racik*, *padang sari*, *gébot*, *jidah*, *éndon*, *sari mahi* などのいずれか数品種とが混ぜあわされたものである(第3表)。混合割合は、主品種である *baod* または *baod sikěp* が籾数で半分から3分の2を占め、残りはそれ以外の数品種からなる。主品種と組み合わせられるのはいずれも「昔の品種」であって、これらは今日では単独栽培はされず、*galiwur* の構成品種としてのみ栽培される。*paré gèdé* 以外の品種が *galiwur* の構成品種として用いられることもあるが、きわめて稀なことで、筆者が確認した範囲では *paré gèdé* と *céré* を1:1に混ぜあわせたもの、陸稲どうしを混ぜあわせたもの

22) *galiwur* から調製された米 (*béas*) は、*béas borontok* または *béas galumpung* と呼ばれるが、これもやはり独立した1つの品種のように扱われる。

が、それぞれ1例みられたにすぎない。*paré gèdé* と *ségon*, あるいは *cèré* と *ségon* を混ぜあわせるのは、脱粒性（従って脱穀方法）が異なるため不可能であるという。また、*ségon* どうしを混ぜあわせるのは、品種による生育期間の差が大きすぎるという理由で行なわれない。言うまでもなく、ウルチ種とモチ種を混ぜあわすこともされない。

村人の述べる *galiwur* 栽培の利点は、(1) 危険分散、(2) 増収効果、(3) 好みの味を作りだす、の3つに分けることができる。

まず、危険分散の効果は“*untung ieu, untung itu*”（運のよいのは、この品種かも知れないし、あの品種かも知れない）という村人の意見に代表される。ある品種の作柄が思わしくなくても、他の品種が十分な作柄をもたらすことによって、何らかの理由による壊滅的減収を回避することができるというのである。ある村人は、具体的に強風に対する作柄の安定性を確保する手段として、*galiwur* を植え付けると解説する。*rampak*（一斉に出穂）の段階で強風が吹くと糝（*hapa*）がふえるので、稲の出穂期が、乾季の末期など風の吹きやすい季節にぶつかることを村人は大変恐れるが、たがいに生育期間をわずかに異にする品種を組み合わせた *galiwur* を栽培すれば、比較的長期にわたって出穂するので強風による被害は軽微なものとなる。

*galiwur* 栽培は、また、増収効果を期待して、すなわち、収量をできるだけ大きくする（*supaya alus-alusan*）方策であるとも説明される。*galiwur* 栽培が、単一の品種のみを栽培した時に比べ、収量において優る理由を、ある村人は「稲穂が2層にも3層にもなるから」と解説する。*galiwur* を構成する品種のうち、「わずかに短稈の品種はわずかにワセ（*hawara*）で、わずかに長稈の品種はわずかにオクテ（*leuir*）である」というから、両品種間の出穂時期のずれと草丈の差により、開花期の稲穂がより有効に日照を受けるような効果もたらされるのだろうか。

別の村人は、また、*galiwur* のメンのウマサを強調する。とりわけ構成品種のひとつが *jidah* のような香りを持つ品種である場合には、この理由がよく聞かれる。経営水田の小さな村人はしばしば栽培品種を換えるが、「誰そのの

水田の *galiwur* はウマイ」という理由から、その水田での刈り取り作業で得た現物報酬を種籾として自己の経営水田に植え付ける例は少なくない。先に述べた *paré gèdé* と *cěré* とを混ぜた村人も、食味をその理由にあげる。すなわち、「*cěré* だけでは“強すぎる” (*sěsěg teuing*)」ので、適度な粘り気を加えるため *paré gèdé* と混ぜあわせたというのである。

*galiwur* 栽培について村人のあげる以上3つの利点のうち、はじめの2つは、いずれも *galiwur* の構成品種が生育期間をわずかず異にしているという特徴に由来する。*galiwur* のこの特徴は、収穫慣行と関連づけるとまた別の利点をもたらす。それは最適収穫時期に適度な幅をもたせることである。経営水田の小さい村人は刈り取り作業を他の村人に開放する必要はなく、経営主(女)が1人で、あるいは娘と一緒に刈り取るが、収穫後処理がその日のうちに可能な稲穂量は限られるので、刈り取り作業はいく日にもわたる。このような刈り取り方法をとる者にとって最適収穫時期に適度な幅があることは、大変好都合となる。

種ぞろいの一定しない *galiwur* は、また、経営水田がある程度広い者には、その“手取り”をふやす効果をもたらす。というのは、刈り取り作業を開放するのは水田1カ所につき1日だけであるから、その時点での未熟穂が多ければ一斉刈り取り作業による刈り取り高は少なく、従って刈り取り作業への参加者に与える報酬の総量を少なくすませることができる。このことは、水田の経営主が家族労働のみによって行なう *doknén* 作業(一斉刈り取り作業以前の刈り取り)と *ngagěmpélan* 作業(一斉刈り取り作業後に行なう遅れ穂刈り)による刈り取り高がそれだけふえることを意味する。水田の経営主が小作人であっても同様である。小作人が支払うべき地代は一斉刈り取り作業による収穫高(ただし、刈り取り作業参加者へ報酬を与えた後の残り)を折半した量であって、*doknén* 作業と *ngagěmpélan* 作業による収穫はすべて小作人の取り分となるからである。

最後に、*galiwur* 栽培と収穫慣行に関連して問題となるのは、穂摘みナイフ使用との関係である。穂摘みナイフ使用、あるいは、鎌刈りの普及を阻む要因

をめぐって、従来いくつかの説明がなされているが、<sup>23)</sup> *galiwur* 栽培と関連づけるとまた異なった説明が可能になる。すなわち、*galiwur* 栽培の利点はその構成品種が生育期間をわずかずつ異にしていることに由来するのであるから、その利点は鎌でなく、穂摘みナイフを使用してこそ生かされることになる。村人は、*galiwur* 栽培を続ける限り、穂摘みナイフの使用をやめるわけにはいかないのである。

## 参 考 文 献

COLLIER, W. L., SOENTORO, G. WIRADI and MAKALI

1974 "Agricultural technology and institutional change in Java." *Food Research Institute Studies* 13(2):169-194.

DEPARTEMEN PERHUBUNGAN, LEMBAGA METEOROLOGI dan GEOFISIKA

1969 *Tjurah Hudjan Rata-Rata di Djawa dan Madura : Periode 1931-1960.*

DEPARTEMEN PERHUBUNGAN, PUSAT METEOROLOGI dan GEOFISIKA

1971-79 *Data Iklim di Indonesia.*

DEPARTEMEN PERHUBUNGAN, PUSAT METEOROLOGI dan GEOFISIKA

n. d. *Almanak* 1979

DJOECHRONI

1946 "Desa Pondokkaso-Tonggoh." In : *Beberapa Desa : Laporan Penyelidikan Pekerjaan Jang Dilakoeikan dalam Boelan Oktober 1946 dalam 8 Desa di Djawa.* pp. 113-150. Djakarta : Kantor Penyelidikan Oemoem.

DOVE, M

1980 "The use of the finger knife among the Iban." *American Ethnologist* 7:371-373.

IGARASHI, T

1983 "Seeking the dates of birth of children : An age-estimation method that combines dental age with indigenously expressed "time of birth" for use in Priangan, West Java." *Proceedings of the Fourth International Symposium on Asian Studies, 1982. Vol. III Southeast Asia.* Hong Kong : Asian Research Service.

加納啓良

1979 『バグララン』アジア経済研究所.

23) たとえば COLLIER *et al.* [1974], DOVE [1980], MILES [1979], 村井 [1978:111-113]など。

KUSNADI

1980 *Tehnik Menanam Padi dalam Pencegahan Hama Wereng*. Garut : P. T. Alma'arif.

LBSS [Lembaga Basa &amp; Sastra Sunda]

1976 *Kamus Umum Basa Sunda*. Bandung : Penerbit Tarate.

MILES, D

1979 "The finger knife and Ockham's razor : A problem in Asian culture history and economic anthropology." *American Ethnologist* 6:223-243.

本岡 武

1970 『インドネシアの米』創文社.

村井吉敬

1978 『スンダ生活誌』日本放送出版協会.

MUSTAPA, H. H

1977 *Bab Adat-Adat Orang Sunda*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, (原書は1913年出版).

OVERBEEK, J. K. and W. J. STOKER

1937 *Malaria in the Netherlands Indies and Its Control*. Batavia: G. Kolff & Co.

RIGG, J

1862 *A Dictionary of the Sunda Language of Java*. Batavia : Lange & Co.

SATJADIBRATA, R

1942 *Kamoes Soenda-Melajoe*. Djakarta : Balai Poestaka.

SHIRAISHI, M

1982 "Role and problems of agricultural co-operatives in rice marketing in Indonesia." In : *Socioeconomic Study of Rice Farming and Marketing in Indonesia : A Case Study of Gadingsari, Central Java*. pp. 123-132. Tokyo: Nodai Research Institute, Tokyo University of Agriculture.

玉井虎雄

1944 『農村實態調査』(総調資料第六三号). ジャワ軍政監部総務部調査室.

上野福男

1944 『農村實態調査報告』(総調資料第六一号). ジャワ軍政監部総務部調査室.

山口頼夫

1943 『東印度諸島ノ疾病』ジャカルタ : ジャワ新聞社.

矢沢文雄

1975 「インドネシアの稲作」 農林省熱帯農業研究センター（編）『熱帯アジアの稲作』 pp. 345-360. 農林統計協会.

## コメント

宮川 修 一

著者は本年6月の本研究会例会で、ここに掲載されたジャワ島の一村の水稲耕作について報告しているが、その際私もお話を伺い、たいへんに興味をひかれ、いくつかの質問をさせていただいたことを覚えている。というのも、個人的事情にわたるが、私も昨年東北タイの農村での農業調査を終えてきたところであり、同地の稲作を見慣れた眼からは著者の報告する村の稲作はあたかも別世界のどのような印象をもったからである。そのような立場から極めて私的な感想をこの報文について述べてみたい。

東南アジアにおいて、年間の降雨量や降雨パターンがイネの栽培方法を規定するのは一般的傾向であろう。けれどもここに記された村では雨季と乾季の存在にもかかわらず通年の作付が可能であって、苗代作りは収穫が終った時点で始まり、しかも感光性のない同一の種類イネを栽培するため、そこには季節の変化とは全く無関係の7カ月周期の農作業暦が繰り返されることとなる。在来稲を用いたこのような例は極めてめずらしいのではないか。灌漑が整備されていても作季は1年単位で完結している場合が東南アジアでは一般的であろう。

通年栽培が可能なこの村では、全戸一斉の作季が実施されているという。そしてこの目的は出穂期を揃えることによりネズミの被害を回避することにあるとされている。この関係のいわば実験的証明の例として、高収量短稈品種の導入による慣行農法の一時的破壊とそれによる鼠害の増加があげられている。すなわちネズミが村の作季を規制するということになる。類似の例をさがすと、たとえば大正から昭和初期にかけての日本の暖地での晩植栽培の励行は、三化メイチュウを回避するためにとられた措置であった。しかしこの虫害は当時多収型の晩稲が導入される過程で生じた過渡的な事件であり、この村の場合とは歴史的経過が全く異なっている。

ところでこの村の周辺でもみられる一斉型作季は、下流域のバンドン平地では行なわれていないという。このちがいはどこから来るのであろうか。村人が語るように鼠害が作季を全村的に規制するならば、そうでない地方の事情と比較してみたいものである。

この村の稲作のいまひとつの興味ある点は、その入念な栽培技術である。たとえばモチ種だけの穂播き、植付前の除草をさんだ2度の均平作業、余り苗の処置などは、東北タイの大雑把でバクチのような稲作と比較すると、考えもつかない丁寧さである。けれどもこれほど熱心な耕作をして

その収量はどの程度なのであろうか。惜しいことに報告には収量の記載がない。このために他の地域との比較に著しい困難が生じてしまう。けれども文中には一部世帯を除き米は自給でできていないとあるから、おそらく $ka$ あたり5tも6tもとれる稲作ではあるまいと思われる。低収と推察するもう一つの理由は穂摘みナイフの使用にある。HOKI〔1983: 11-23〕によると、収量段階がある水準を超えると、刈取所要労働量の増大を抑えるため、穂摘みナイフは鎌へと代るとされている。おそらく収量が低い段階で頭打ちとなったまま、農法が際限なく細密化していった結果をこの村の状態は示しているのであろう。報告の末尾にある「品種混合」も、穂摘みナイフの使用を前提とした農法の細密化の果てに生み出された一つの技術ではないだろうか。災害回避のための品種混合例がベトナム〔平野 1968: 78〕やネパール〔MORISHIMA *et al.* 1980〕で知られているが両者の背景は異なるものと考えられる。

かつて嵐〔1975〕は「作季のことがよくわかっておれば、その地方の稲作のほぼ全貌をも推察しうる」と述べたが、このことは熱帯の稲作地帯でもそれなりにあてはまるのではないかというのが、東北タイで私の感じているところである。この報告での稲作はあまりにも東北タイの天水稲作とはかけ離れてはいるが、そのような違いを超

えて、やはり同様の感慨をもった。本報告の、やや煩瑣とも思えるほどの現地語表示をも含め、イネと稲作をめぐる綿密な観察は在来農法の重要な資料となろうし、そのような観察は長期滞在の研究者のみがなすうる貴重な仕事であると思う。

(岐阜大学農学部)

## 文 献

嵐 嘉一

1975 『近世稲作技術史』農山漁村文化協会。

平野哲也

1968「ベトナムの稲作」『東南アジアの稲作』日本作物学会, 70-85。

HOKI, M

1983 Conventional farming tools and labor requirement for rice in Sarawak, Malaysia. T. Isa (ed.) *Studies on the Conventional Farming Tools and the Evolution of Farming Systems in Southeast Asia*. Tsu: Faculty of Agriculture, MIE Univ., 11-23.

MORISHIMA, H., Y. SANO and H. I. OKA

1980 Observations on Wild and Cultivated Rices and Companion Weeds in the Hilly Areas of Nepal, India and Thailand. National Institute of Genetics.